

畑ヶ田南遺跡 (HDS2013 - 1) 現地説明会資料

2013年12月14日(土) 富田林市教育委員会

場所：若松町一丁目(旧みどり保育園敷地内) 調査原因：市営住宅建替え
調査期間：平成25年7月18日(木)～調査中 調査面積：約1,360㎡
調査担当：生涯学習部文化財課 角南 辰馬

1. 見つかった遺構

今回の調査では、主に飛鳥時代(7世紀)から平安時代(10世紀)にかけての土器などが出土しました。掘立柱建物は現時点で11棟の存在を確認できています。建物6を含む調査区東端では、平安時代の柱穴が集中していますが、それ以外のほとんどは奈良時代と考えられます。調査区西側では、南北約7m、東西約9mで方形に区画された溝(幅約50cm)がみつき、溝の中には柱が建てられていたようで、掘立柱建物に先行する可能性があります。

2. 出土した陶硯片

方形に区画された溝の中から、陶硯(とうけん、陶質の硯(すずり)のこと)が出土しました。残存する長さは約8cm、高さ約3.5cmで、上からみた形が円形をした円面硯(えんめんけん)と呼ばれるものです。直径は復元すると約15.8cmになります。陸は非常に滑らかで、かなり使用されていたことがうかがえます。硯面を支える台は、下から方形状に切り取られ、残った部分が脚となっています。台の側面の穿孔が脚と脚の間の中央にあり、かつ同じ幅の脚が等間隔に配置されていたとすれば、脚の数は5脚以下になります。

このようにシンプルな形をした陶硯ですが、全く同じ形の陶硯はこれまで出土していないようです。近いものを挙げるとすれば、隼上り瓦窯跡(はやあがりかわらがまあと、京都府宇治市)の円面硯があります。台の下を半円状に切り取って、8本の脚をつくり出したもので、「眼象脚(げじょうきゃく)円面硯」と呼ばれています。しかし、脚の数や側面に穿孔がないことが異なり、畑ヶ田南遺跡のものは、台の切り取り方が「眼象」と呼べるほど曲線がありません。このほか、小角田遺跡(こかんだいせき、大阪府堺市)の円面硯は、台の下を方形に切り取り、4本の脚をつくり出しています。穿孔があることも似ていますが、側面ではなく外堤の縁に上からあけられています。

両者はともに飛鳥時代のものであり、奈良時代の陶硯が多く出土している平城京跡では、このようなタイプのものがみられないことから、畑ヶ田南遺跡の陶硯は飛鳥時代のものと推定されます。

3. 陶硯が出土した意義

筆と墨を用いて文字を書くことは、当時は役人や僧侶などによって行われ、一般民衆には無縁でした。今回の調査地に近接する畑ヶ田遺跡では、2011年の調査で奈良時代の銭貨「神功開寶(じんぐうかいほう、765年初鑄)」5枚を入れて埋納した土師器を確認しています(写真2)。類例は平城京跡で多数知られていますが、地方で見つかることは稀です。

このように、畑ヶ田南遺跡を含む一帯には、連続性は不明ながら、飛鳥時代から奈良時代にかけて通常の集落とは異なる要素がみられ、官衙(かんが)的施設(例えば地方の役所など)が存在した可能性が高いのではないかと考えられます。

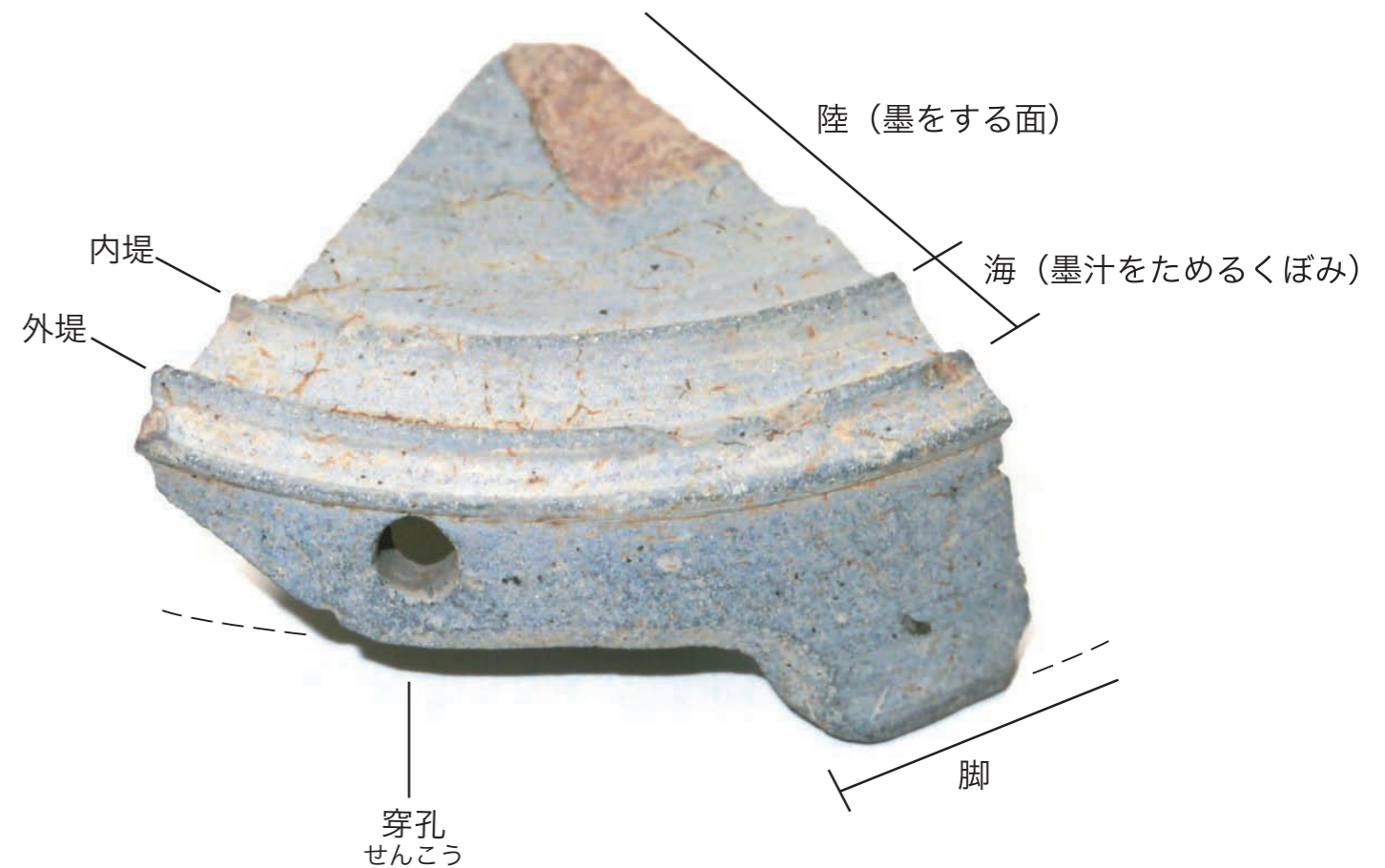


写真1
畑ヶ田南遺跡で見つかった陶硯

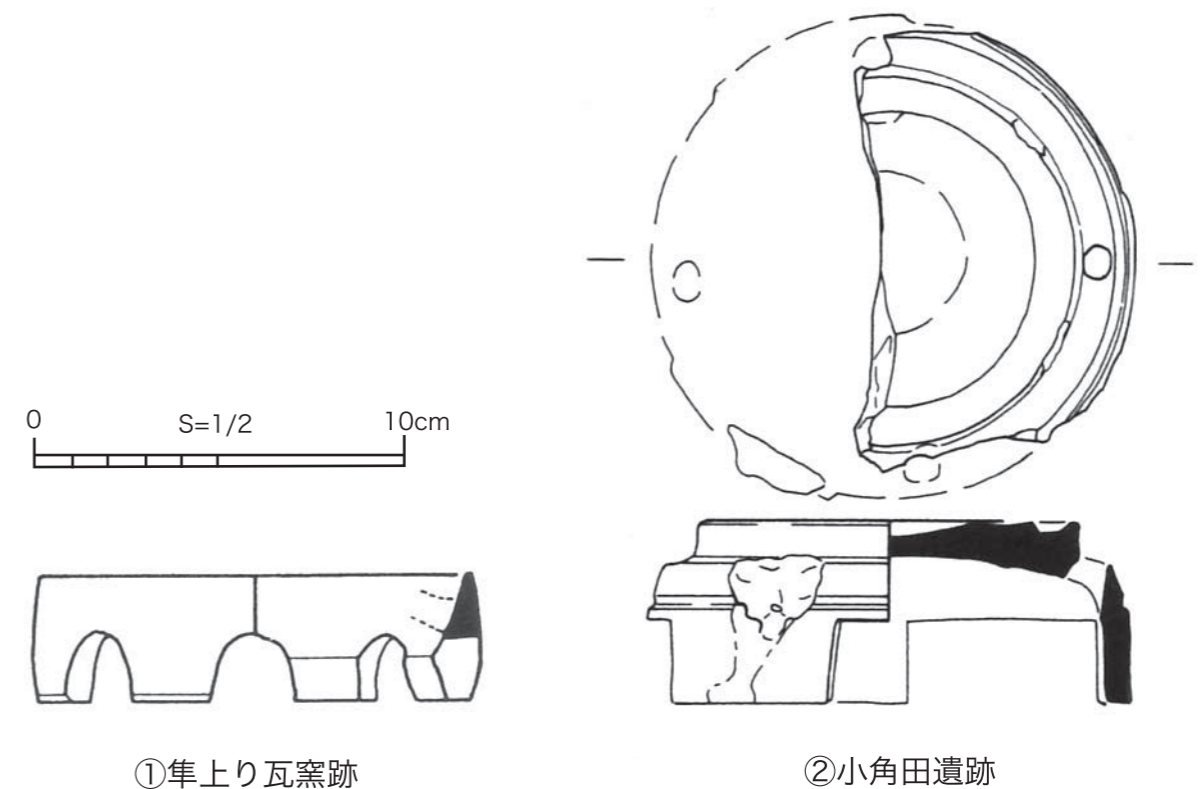


図1 飛鳥時代の陶硯

①杉本 宏 1987「飛鳥時代初期の陶硯—宇治隼上り瓦窯跡出土陶硯を中心として—」『考古学雑誌』第73巻第2号
②堺市教育委員会 1995『堺市文化財調査概要報告 第52冊』

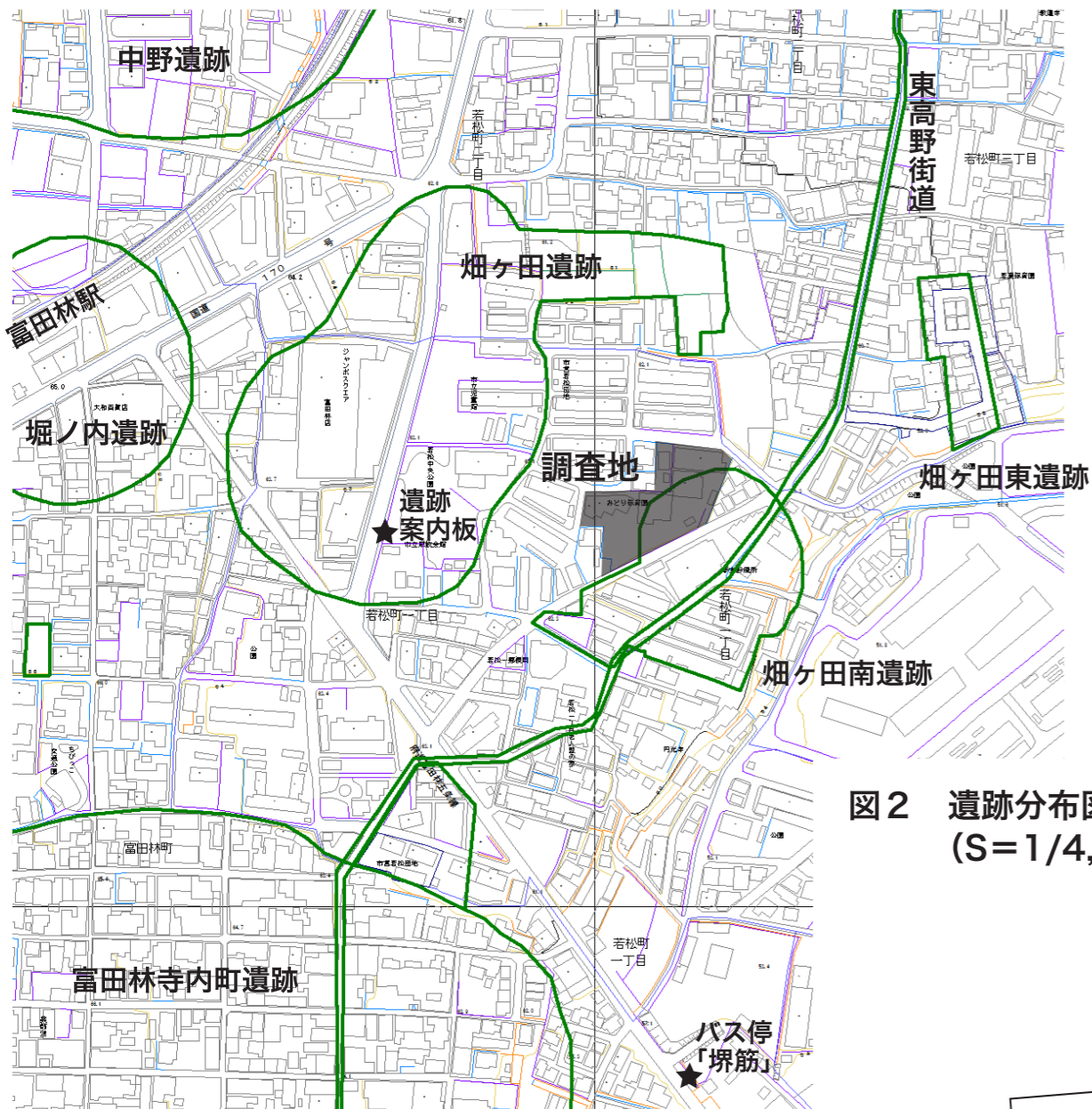


図2 遺跡分布図 (S=1/4,000)



写真2 銭貨5枚を入れた土師器 (畑ヶ田遺跡)

現在、コミュニティセンター「かがりの郷」で展示中
 (開館時間は9時~17時15分。1階展示コーナーにて、観覧無料。金剛バス
 千早線・河内線・白木線のいずれかに乗車し、「大伴」バス停で下車すぐ)

太枠内が
後半部分の調査区
(今回の公開範囲)

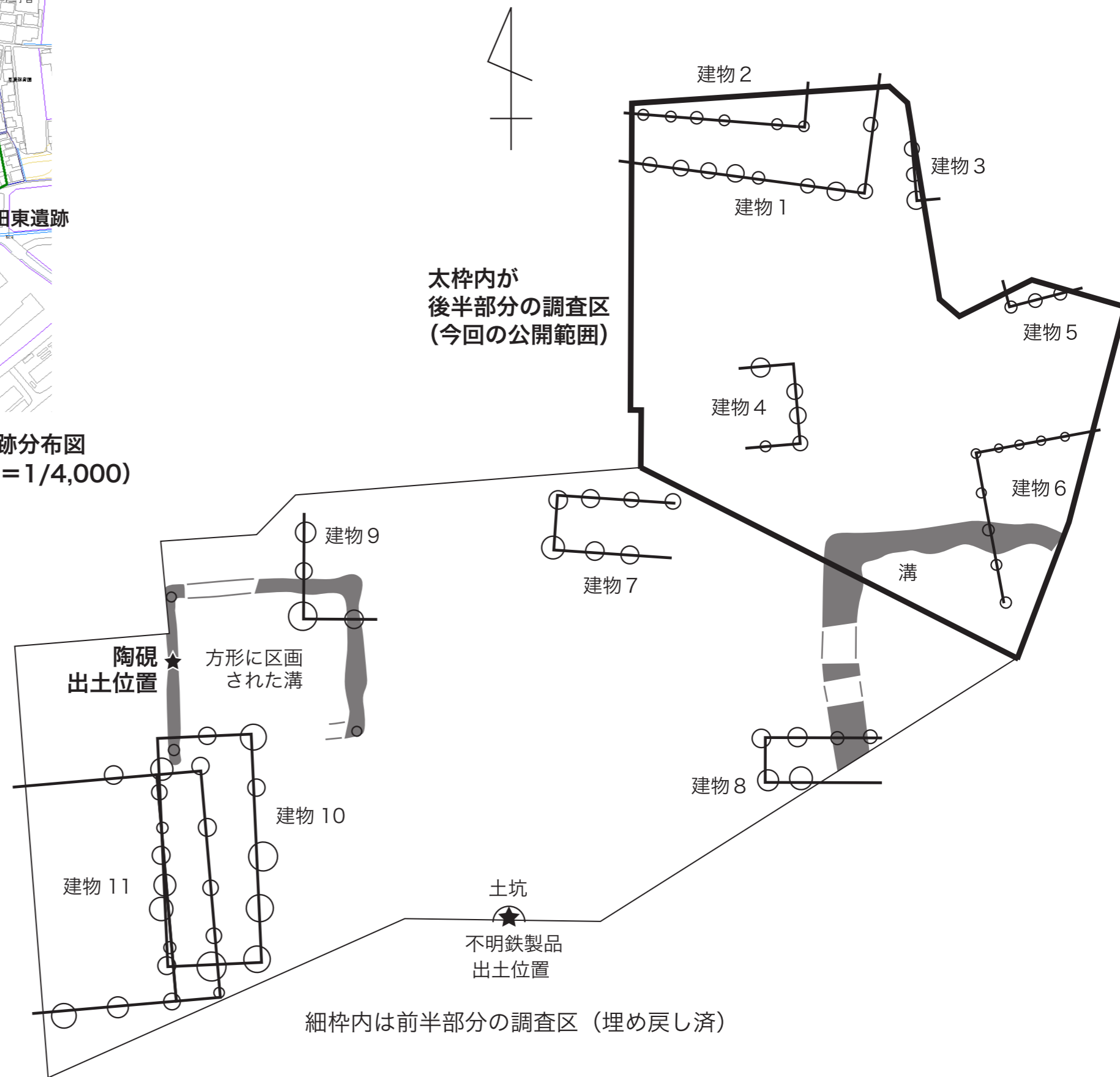


図3 見つかった遺構の配置略図 (S=1/200)